

第1問次の文章を読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。

「1」人間がこの世に生きてゆくためには、いろいろなことをしなくてはならない。自分を取り巻く環境のなかで、うまく生きてゆくためには、環境について多くのことを知り、その仕組みを知らねばならない。このために、（1）自然科学の知が大きい役割を果たす。自然科学の知を得るために、人間は自分を対象から切り離して、客体を観察し、そこに多くの知識を得た。太陽を観察して、それが灼熱の球体であり、われわれの住んでいる地球は自転しつつ、その周りをまわっていることを知った。このような知識により、われわれは太陽の運行を説明できる。

「2」このような自然科学の知は、「自分」を環境から切り離して得たものであるから、誰に対しても（ア）普遍的に通用する点で、大きい強みをもっている。自然科学の知はどこでも通用する。しかし、ここで一旦切り離した自分を、全体のなかに入れ、自分という存在とのかかわりで考えてみるとどうなるか。なぜ、自分はこのような太陽の運行と関連する地球上に住んでいるのか。自分は何のために生きているのか、などと考えはじめるとき、自然科学の知は役に立たない。

それは、出発の最初から、自分を抜きにして得たものなのだから、当然のことである。太陽の動きや、はたらきは、自分と無関係に説明できる。しかし、他ならぬ自分という存在と、太陽とは、どうかかわるか。

「3」太陽と自分とのかかわりについて、（2）A確たる知を持つて生きている人たちについて、（注1）ユングは彼の自伝のなかで述べている（『ユング自伝II』）。ユングが旅をして（注2）プロ・インディアンを訪ねて行つたときのことである。インディアンたちは、彼らの宗教的儀式や祈りによって、太陽が天空を運行するのを助けていると言うのである。「われわれは世界の屋根に住んでいる人間なのだ。われわれは太陽の息子たち。そしてわれらの宗教によって、われわれは毎日、われらの父が天空を横切る手伝いをしている。それはわれわれのためばかりでなく、全世界のためなんだ」とインディアンの一人は語った。彼らは全世界のため、太陽の息子としての勤めを果たしていると確信している。これに対して、ユングは次のように『自伝』のなかで述べている。

「4」「そのとき、私は一人一人のインディアンにみられる、静かなたたずまいと『氣品』のようものがなにに由来するのかが分かった。それは太陽の息子ということから生じてくる。彼の生活が宇宙論的意味を帯びているのは、彼が父なる太陽の、つまり生命全体の保護者の、日々の出没を助けているからである」

「5」インディアンたちは、彼らの「（3）神話の知」を生きることによって、ユングが羨望を禁じ得ない「B氣品」をもつて生きている。これに対して、近代人は何とせかせかと生きていることか。近代人は（4）豊かな科学の知と極めて貧困な精神とをもつて生きている。ここで、インディアンたちが彼らの神話の知を、太陽の運行にかかわる「説明」として提出するとき、われわれはその幼（イ）チさを笑いものにすることができます。しかし、Cそれを、自分をも入れこんだ世界を、どうイメージするのかという、（注3）コスモロジーとして論じるとき、われわれは笑つてばかりは居られない。

「6」自然科学の知があまりに有効なので、近代人は誤つて、コスモロジーをさえ（5）近代科学の知のみに頼ろうとする愚を犯してしまったのではなかろうか。自然科学の知をそのまま自分に「適用」してコスモロジーをつくるなら、自分の（ウ）ヒ小さ、というよりは存在価値の無さに氣落ちさせられるであろう。自分がいつたい何をしたのか「計量可能」なものによって測定し

てみる。相当なことをしたと思う人でも、宇宙の広さに比べると無に等しいことを知るだろう。特に、死のことを考えると、それはますます無意味さを増してくる。

〔7〕 このあたりのことにうすうす気づいてくると、自分の存在価値を見出すために、安易な「神話」でもつくり出すより仕方がなくなつて、「若いときには」自分はどうした、こうした、というような安価な「神話」を語つて、近所迷惑なことをする。あるいは、宗教家という人たちも、コスモロジーについて語るよりは、安易な道学者になつてしまふ。つまり、「よいこと」を、これほど沢山している、というくらいのことを誇りとしないと、自分の存在価値を示せないのである。

〔8〕 古来からある神話を、事象の「説明」であると考へ、未開の時代の自然科学のように誤解したため、神話や昔話などの価値を近代人はまったく否定してしまつた。確かに自然科学によつて、自然をある程度支配できるようになつたが、それと同じ方法で、自分と世界とのかかわりを見ようとしたため、近代人はユングも指(エ)テキするように、貧しい生き方、セカセカした生き方をせざるを得なくなつたのである。

〔9〕 もちろん、だからと言ってわれわれはすぐに、プエブロ・インディアンのコスモロジーをそのままいただくことはできない。われわれは既に多くのことを知りすぎている。われわれとしては、自分にふさわしいコスモロジーをつくりあげるべく各人が努力するより仕方がないのである。われわれは、(注4)エレンベルガーの表現を借りるなら、自分の無意識の神話產生機能に頼らねばならない。しかし、そのことをするための一助として、古来からある神話や昔話を「非科学的」「非合理的」ということで簡単に(オ)ハイ斥するのではなく、その本来の目的に沿つた形で、その意義を見直してみることが必要であろう。

(河合隼雄『イメージの心理学』による)

- (注) 1 ユングースイスの精神医学者(一八七五～一九六一)。分析心理学の創始者。
2 プエブロ・インディアン——北アメリカ南西部に居住し、定着農耕を営んできた先住民族の総称。
3 コスモロジー——宇宙論。
4 エレンベルガー——イスイスの精神医学者(一九〇五生まれ)。『無意識の発見』の著がある。

基礎講座第1回国語問題

問1 傍線部(ア)～(オ)は熟語の一部であるが、これにあたる漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

- (ア)フ|遍的 ① 事実とよくフ合している。
② それはフ朽の名作である。
③ パソコンが職場にフ及する。 (イ)幼|チ
④ 税金のフ担を軽くする。
⑤ 事件にフ隨して問題が起ころる。
- ①生涯のチ|己に出会う。
②世界大会を誘チする。
③会議によくチ刻する。
④川にチ魚を放流する。
⑤厚顔無チと責められた。

基礎講座第1回国語問題

- ①ヒ境への旅を企画する。
 ②罪状をヒ認する。
 ③ヒ凡な才能の持ち主である。
 ④ヒ近な例を上げて説明する。
 ⑤安全な場所へヒ難する。
- （ウ）ヒ小
 ①あの二人は好テキ手だ。
 ②汚職をテキ発する。
 ③快テキな生活が約束される。
 ④内容を端テキに説明する。
 ⑤窓ガラスに水テキがつく。

- （オ）ハイ斥
 ①③回戦でハイ退する。
 ②核兵器のハイ絶を訴える。
 ③ハイ気ガスが空気を汚す。
 ④それはハイ信行為である。
 ⑤細かなハイ慮にかける。

問2 波線部(1)～(5)に用いられている「知」を、その内容によって a・b二つのグループに分けるとすると、どのように分けたらよいか。その組合せとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。

- ① a 自然科学の知、確たる知、豊かな科学の知
 b 神話の知、近代科学の知
- ② a 自然科学の知、確たる知、近代科学の知
 b 神話の知、豊かな科学の知
- ③ a 自然科学の知、豊かな科学の知、近代科学の知
 b 確たる知、神話の知
- ④ a 自然科学の知、近代科学の知
 b 確たる知、神話の知、豊かな科学の知
- ⑤ a 自然科学の知、豊かな科学の知
 b 確たる知、神話の知、近代科学の知
- ⑥ a 自然科学の知、確たる知
 b 神話の知、豊かな科学の知、近代科学の知

問3 傍線部A「確たる知を持つて生きている」とは、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

- ① 固有の信仰を守ることによって、宇宙における自己の役割を果たしているということ。
 ② 自然科学を無視して、自らを中心とする宇宙観でしか行動しないということ。
 ③ 自分と自分を取りまく宇宙との関係を科学的に説明するということ。
 ④ 自らがなによりもこの宇宙の中心であると信じて疑わない生き方をしているということ。

⑤ 自分という存在なしには宇宙はありえないと思いこんで、自己を賛美するということ。

問4 傍線部B 「気品」とあるが、その気品は、何から生まれてくるのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

- ① 自分たちが、宇宙全体の支えであり、その宇宙の中心であるという自負から。
- ② 自分たちは、宗教的生活を通じて世界に役立っているのだという確信から。
- ③ 自分たちが、科学で解明できないものまでもすべて説明できるという誇りから。
- ④ 自分たちは、宗教や儀式によって、環境と一体になっているという信仰から。
- ⑤ 自分たちが、宇宙全体を支配しており、その頂点に立っているという自信から。

問5 傍線部C 「それを、自分をも入れこんだ世界を、どうイメージするのかという、コスモロジーとして論じるとき、われわれは笑つてばかりは居られない。」とあるが、なぜ「笑つてばかりは居られない」のか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

- ① 「自然科学の知」の科学性が希薄になり、「神話の知」の優位性を是認することになるから。
- ② 「自然科学の知」の非科学性が露呈し、「神話の知」の科学性が際立つことになるから。
- ③ 「自然科学の知」の万能性が崩壊し、「神話の知」の神秘性が新たな価値基準になるから。
- ④ 「自然科学の知」の限界が意識され、「神話の知」の存在意義を再確認する必要が出てくるから。
- ⑤ 「自然科学の知」に依存する現代社会を否定し、「神話の知」を母胎とした前近代社会を肯定することになるから。

問6 本文で述べられている筆者の主張に最もよく合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

- ① 自然科学の知は、人類に大きな貢献を果たしたが、その限界も見えはじめている。われわれは科学への依存を断念し、めいめいがその自然観を確立し、古代へと回帰しながら神話の知を再発見すべきである。
- ② 人間存在の証か求める神話の知は、自然を客体化して発達した自然科学の知によつて裏付けられてきた。これからはその客觀性を一層深め、それを生命の意義の解明に生かす必要がある。
- ③ 人間存在の根源は、自然科学の方法だけでは把握しきれない。われわれは、神話や昔話に込められた人間の尊厳や価値についてあらためて考察し、めいめいの世界観を創造しなければならない。
- ④ 近代の自然科学は、われわれに多くの恩恵と弊害をもたらした。その弊害を回避するために、古代の神話や昔話の世界にもどつて、生命や宇宙の原初的な意味を探究しなければならない。

⑤ 自然科学がいかに発達しても、広大無辺な宇宙を解明しつくすことはできない。その限界を打破するのはわれわれの生の証としての神話の知であり、それを解明してわれわれはじめて永遠性を獲得することができる。